

卒業します : 卒業を迎えるにあたって

佐野, 直美 / SAN0, Naomi

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

51

(開始ページ / Start Page)

178

(終了ページ / End Page)

178

(発行年 / Year)

1995-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019825>

おくり

そして

むかえる

卒業します

卒業を迎えるに

あたたつて

佐野 直美

平成三年四月、不安と希望を抱えながら入学してからはや四年。あつという間のことでした。ぶじに卒論も提出し、この原稿を皆さんが手にしている頃には、私は既に卒業していることと思います。

私は万葉集を学びたいと思い、日本文学科に入り、そして坂本ゼミの一期生として二年間学んできました。最初の頃は、班発表をこ

なすことで精一杯であり、万葉集を理解・楽しむことができませんでした。しかし、無知な私も坂本先生の指導のおかげで、次第に万葉集に慣れ親しみ、万葉集の楽しみが少しわかった気がします。まだまだ学びたいことも多いのですが卒業です。三年生の方にもこの様な楽しみを見つけ、万葉集を心から好きになつてもらいたいと思つています。ゼミの三・四年生、坂本勝先生、そして、法政大学、今まで本当に本当にありがとうございます。た。

(坂本ゼミ 一部 四年)

思い出

秋期文学散歩の

感想など

谷田ちひろ

その日は朝から雨だった。朝から運が悪いなと思った。これから品川駅に行つて京浜急行に乗らねばならない。

一人で行くのも話らないので、杉本教授が乗ると言う十二時十分発の電車に乗ろうとして遅れ、結局一人で行つた。改札を出た所で、或団体が、一種異様な雰囲気をつけていた。これが噂の国文学会である。

そこで勝又教授に捕まったのが運のツキで、この様なモノを書かされる羽目になった。この日は運が悪かった。これで三度目だ。大体私はテストと論文と感想文、凡そ論述と云われるものは大嫌いである。

ところへ、杉本教授が御登場。授業で公言していたのにも拘らず自ら遅刻なさるとは